

研究課題	生徒が生き生きと活動する学校の創造
副題	～ICTを活用した「伝える・つながる」取組を通して～
キーワード	
学校/団体名	公立熊本市立五霊中学校
所在地	〒861-0135 熊本県熊本市北区植木町一木 163 番地
ホームページ	http://www.kumamoto-kmm.ed.jp/sch/j/goryoujh/

1. 研究の背景

本校は、昨年度もパナソニック教育財団からの助成金を受け、大型テレビの導入、他県への先進校視察、校内研修の充実など様々な取り組みを行ってきた。その取り組みの中で、今まで学校で行ってきた様々な「当たり前」を見直し、生徒たちに託すのも大切であると考え、きっかけになった。それによって生徒たちは「先生から言われたから仕方なくする」ではなく、「これをやってみてみたいからする」「これをすることでもっと良くなるから行う」という意識に少しずつ変化し、生徒たちの自主的な活動や生徒の自信、意欲の向上にもつながっていった。また、教員の意識も変化し、生徒主体の行事や学級運営、委員会活動などを以前よりも行うことが多くなってきたように感じる。しかし、そのような変化もまだまだ十分とは言えず、すべてを教員主導で行ってしまうことや生徒が指示されたことのみを行い、達成感を得ることができないこともたびたびあった。また、画一的な指導を行ってしまい多様な生徒に対応した授業や指導ができず、一部の生徒のみが充実感を得ることもあった。学校は生徒のやる気や意欲が充実し、生き生きと活動することでより良い学校になっていくと考える。そのためには生徒が活躍できる場の設定や取り組み、それを効率的に行える ICT 機器などの活用が不可欠であると考えた。

2. 研究の目的

本校では研究テーマを昨年と大きく変えずに、「すべての生徒が主体的に取り組む学校の創造」とし、生徒一人一人がすべてのことに主体的に取り組む学校づくりを目指して研究に取り組んできた。その実現のために研究の背景でも記述した通り、教師主体の指導のみではなく、生徒自身が考え取り組めるような授業、個別最適な学習の充実を行うための研究、教科の特性を生かした取り組みの研究を進め、生徒の学習への意識改善や達成感を持たせていきたいと考える。また、授業のみならず、昨年度同様、学校生活全体で生徒が活躍できる場の設定を行い、ICT 機器を活用することで生徒が様々なことに取り組みやすく、達成感を得られるような工夫を行ってきたい。

3. 研究の経過

研究推進委員会を中心に研究テーマの実現のための取り組みを進めるとともに、教科の特性を生かした授業改善、年3回の研究授業、他県の学校への視察、校内研修などを行い、様々な改善に努める。

また、行事がある際には必ず生徒主体で行うようにし、教師はフォロワーとしての立場を徹底し、

生徒たち一人一人の達成感を高めるように取り組んだ。

- 4月 ○研究テーマ設定（全体テーマ、各教科のテーマ）
ICT を活用した学校行事（学校・委員会・部活動紹介）
- 5月 ○体育大会（生徒主体による運営）
- 6月 ○特別支援教育研究授業
（外部から講師招聘 全職員による参観）
- 8月 ○特別支援教育に関する校内研修（外部から講師招聘）
- 9月 ○学校訪問（授業改善）
- 10月 ○合唱コンクール（スピーカーを活用したパート練習）
- 11月 ○先進校視察復講、評価に関する校内研修
- 12月 ○走歩会
- 1月 ○特別支援教育研究授業
（外部から講師招聘、全職員による参観）
- 2月 ○研究のまとめ

4. 代表的な実践

（1）授業実践における具体的な取り組み

①特別支援教育の視点からの授業改善

今年度の授業実践では特別支援の視点から授業改善の研究を行った。6月に行った特別支援教育の授業研究ではゴミ拾いをし、そのゴミからアート作品を作り、どのような考えや思いで作成したのかをプレゼンする授業であった。本授業は生徒が自信を持つことを目的にした授業であった。発表のポイントや班での練習だけでなく、早口言葉やクイズなどで生徒の意欲を向上させ、これまでの作成の過程を動画で視聴することで自分の頑張りを視覚化し、自信をもってプレゼン

を行えるような工夫を行った。また、皆の前で発表が難しい生徒は事前に撮影をし、それを流すことですべての生徒が授業に参加するような取り組みも行った。また、授業後の振り返りで生徒同士の良かった点を記入する取り組みは紙ではなくメタモジを使用し、全体が視覚的にとらえられるようにした。（図1）

（図1） 授業の様子



②学習評価に関する校内研修

本年度は授業の実践方法だけでなく、その後の評価についての研修も行った。特に「主体的に学習に取り組む態度」について研修を行った。（図2）

評価方法に関して生徒の「自らの学習状況を把握し、自らの学習を調整しながら、学ぼうと

しているか」「粘り強い取り組みをおこなっているか」について、どのような評価が適切か、また、その評価を生徒にどのように還元していくかについて研究推進委員会を中心に全職員で考えた。この研修を行うことで評価方法についての見直しだけではなく、そのことによる授業改善につなげるようにした。

(図2) 研修の様子



③教科の特性を生かした授業研究

今年度は全体の研究テーマだけでは教科の特性を生かしきれないのではと考え、教科ごとの研究テーマについても教科で話し合いのうえ設定した。その後は年度当初に設定したテーマにそって研究を行い、夏休みに中間報告、年度末に結果と反省を行った。また、記入に関しては teams を用いて、他教科の職員も閲覧できるようにし、自分の教科の取り組みにも活かせるようにした。(図3) 教科ごとの設定や振り返りを行うことでテーマに関する議論だけでなく、普段の授業での課題や悩みについても話し合うきっかけにもなり、教員同士での情報交換も密に行う機会にもなった。(図4)

(図3) 教科ごとの取り組み

<p>1. 授業で取り組みたいこと</p> <p>問題を解決する過程や考え方について筋道を立てて説明する能力をつけるために、自分の考えをまとめて他へ説明したり、他との対話を通して問題を解決していく学習を進めることで、数学的な思考力を身につけさせたい。</p> <p>また、基礎的事項についての習熟の時間をとることで、思考の元となる基礎的事項を定着する学習を進めていく。</p>
<p>2. なぜそれに取り組みたいのか、ねらいや設定理由</p> <p>問題を解決を他へ説明や対話活動を通して、それまでに身につけた基礎的基本的事項をより深く理解し細括して扱う能力、すなわち数学的な思考力が身につくと考えられる。</p> <p>また、基礎的事項の繰り返し習熟活動により、考えをまとめるための基礎基本事項を身につけて活用する事ができると考えられる。</p>
<p>3. 具体的な手立て</p> <p>① 与えられた問題を自分の課題として、解決していく過程や方法を説明する学習活動を進める。</p> <p>② 習熟カードを使って、問題を繰り返し解くことで、基礎的基本的事項の習熟と理解を深める。</p> <p>③ 数学的事項の理解を進めるために、それらを文章としてまとめ、総括する場を設定する。</p> <p>④ 与えられた課題について、他との対話を通して、1つの解決方法だけでなく多角的な見方や解決方法を見出すこと(経緯)を大切にしていく。</p>
<p>4. 中間承認報告</p> <p>前題や単元の問題について自分の問題として、解決の過程や解き方を説明する活動で、少しずつ自分の考えをまとめてよりよく説明する事ができるようになってきた。しかし、確信した考えを修正し、他の考え方に思い至る場面は少ない。これから、説明する経験が増えることで、意欲的な学習活動ができ、思考力が身についていくと考える。</p> <p>習熟カードの活用は上手くいっている。同じ問題でも扱い方を変える工夫で学習活動に変化ができ、飽きずに習熟に取り組むようになってきた。</p>

(図4) 情報交換の様子



(2) 学校生活における生徒主体による様々な取り組み

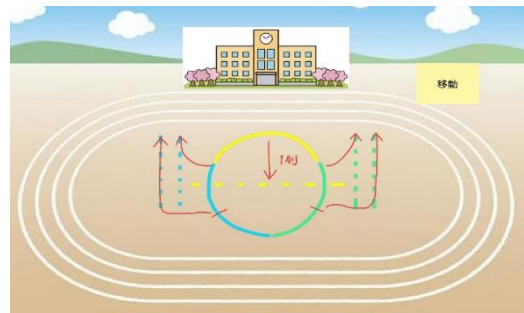
①生徒主体による行事運営

学校で行われる様々な行事を教員が作り上げていくのではなく、生徒たちが自分の力で作り上げていくようにした。その中で体育大会はここ数年で特に力を入れて行っている行事の一つである。体育委員長を中心に全体練習や予行練習、結団式などすべて生徒が指示を出し、教員は最後に助言を行う程度にしている。(図5) また、ダンスを種目として行っており、そのダンスの内容もすべて3年生が考え、当日までに仕上げるようにしている。(図6) この取り組みは生徒たちの意欲向上や自信にも繋がっているようである。また、リーダーの育成だけでなくそれを支えるフォロワーとしてどのように行動すべきかを考えるきっかけにもなっていた。

(図5) 生徒による予行の反省



(図6) 生徒が作成したダンスの隊形図



②週1回の話し合い活動

毎週水曜日に話し合い活動を学級で行っている。これはお題を設定し、それについてどのような考えがあるのかを話し合うものである。お題は学級総務で決定したもので「食事は味重視か量重視か」「一番好きな曜日は」などすぐに答えられるものが主である。年度途中では生徒たちが簡単なものばかりではなく「ケンタッキーフライドチキン知らない人に説明してあげてください」のように、考えなければならないものも設定するようになり、より話し合いの内容が充実していった。また、養護教諭と協力し、月の最後の話し合い活動は生徒が考えたものではなく教員側から設定したもので行い、SST という名前で、ソーシャルスキルトレーニングを行った。

この取り組みも教員からの提案ではあるが、学級での実施はすべて学級総務で行い、教師からは助言程度とした。これらの資料はロイロノート・スクールとメタモジクラスルームを使用し、ソーシャルスキルトレーニングに関しては説明のためのシナリオやスライドを準備し、分からないことなどがあればすぐに担当に質問が行えるようにした。(図7)

(図7) 話し合い活動の資料

話し合いをするときのポイント

③相手との意見の違いを確認する

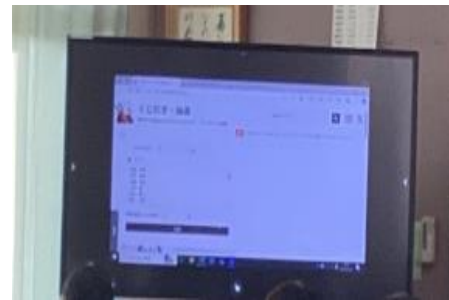
スライド6
次に、相手との意見の違いを確認します。
相手の意見に納得して、自分がゆずれる場合は、そのことを伝えます。話がまとまればここで解決です。

しかし、納得できずにゆずれない場合は、アサーションの方法を参照して、自分の意見を伝えます。
例えば、「Bさんの意見も分かるけど、ぼくは劇がいいと思う。他の班と内容は違うからいいんじゃない?」というように、相手の気持ちを気づかいながら、自分の気持ちを伝えるようにしましょう。
意見が対立するのをさけて、自分の意見をがまんする必要はありません。感情的にならず、落ち着いて伝えましょう。
ここで、相手が納得してゆずってくれたら、解決となります。

(6) 月	話し合いテーマ
(5) 日	将来役に立つ教科は何?
(12) 日	お金があったら食べたいのは焼肉か寿司か?
(19) 日	世界三大珍味で食べたいのは? (トリュフ、フォアグラ、キャビア)
(26) 日	イライラした時どうする?

この話し合い活動を今年度はさらに学校全体でも行いたいと生徒総会で提案があり、全校生徒の可決後、生徒集会で行うようにした。(図8)ただし、事前に発表等が難しい生徒に関しては生徒会担当に担任から伝えておくなど配慮を徹底した。これを行うことですべての生徒が全体の前で発表を行える機会の確保につながった。

(図8) 生徒集会の様子



5. 研究の成果

研究の成果を授業などの学習と生徒が活躍できる場の二つの視点で振り返る。

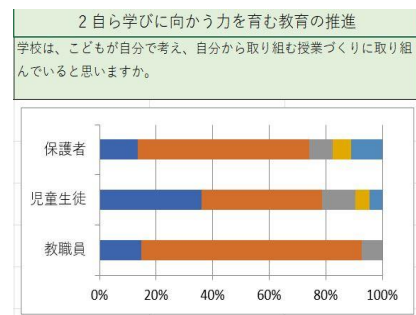
(1) 授業などの学習に関して

年3回行っている学習アンケートの結果から各学年の数値を比較してみた。

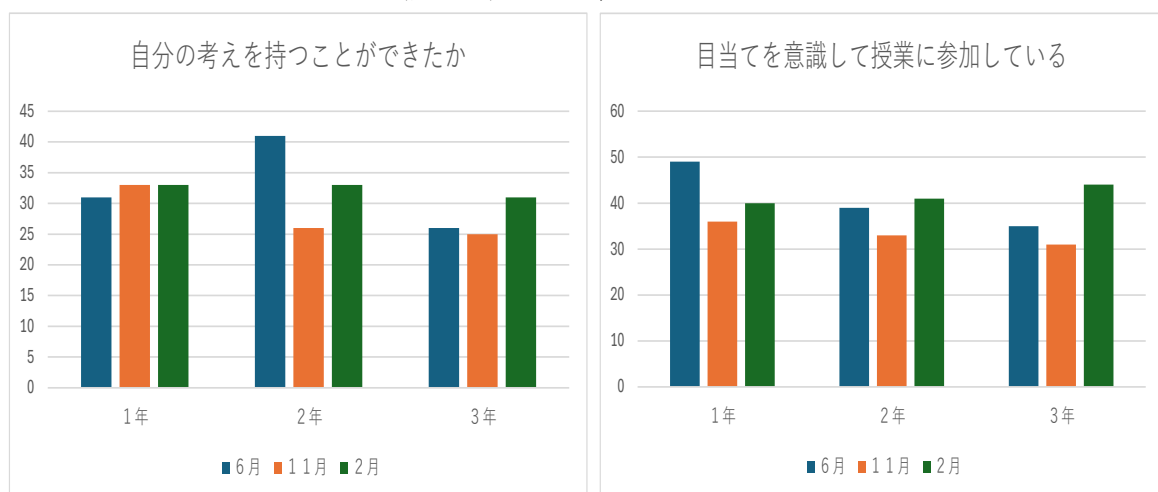
その中で「自分の考えを持つことができたか」「目当てを意識して授業に参加しているか」という項目を見ると、6月の結果と比べると11月には大きく落ち込んでいた。しかし、その後の2月の結果では全て学年において増加傾向にある。

これは学校評価アンケートの「自ら学びに向かう力の推進」という項目から従来の授業スタイルの振り返りや教科ごとの取り組みの改善、評価方法の研修など様々なことを行ったことによる効果も一つの要因ではないかと考える。ただし、6月の数値には届いておらず、さらに改善が必要である。

(図9) 学校評価アンケート



(図10) 生徒アンケート



(2) 生徒一人一人が活躍できる場に関して

昨年度以上に生徒主体の取り組みや ICT を活用した様々な取り組みを行ってきた。また、その

際にも ICT 機器を多く導入することで生徒が取り組みやすく、新たなアイデアも出しやすい工夫をした。そのことにより生徒たちが新たなことに挑戦したり、達成感を得やすくなったたりもした。体育大会の振り返りには「人を引っ張っていくことは難しかったけど、みんなが協力してくれるのでとてもうれしかったです。大変だったけどやってみてよかったです。」などの達成感を得たような感想も多く見られた。また、生徒会の話し合い活動では恥ずかしながらも、全校生徒の前で発表した後に学級から「頑張ったな」「お疲れさま」と言われ、とてもうれしそうな顔を見せている生徒もいた。

6. 今後の課題・展望

本研究は従来の授業の見直しや生徒の活躍する場の設定、ICT 機器を有効活用した取り組みなどを行う中で、すべての生徒が生き生きと活動できる学校を目指し取り組んだ。その結果、生徒たちの自信につながるものも多くあった。しかし、「すべての生徒が生き生きと活動する」という目標にはまだまだ届かず、うまくいかなかった部分も多くある。特に教科ごとの取り組みを今年度は行ったが、取り組みの振り返りを年度途中に入れたのみで、その間の途中経過を振り返る場を設定できていなかった。普段の業務に追われ、振り返りが行えない教科もあった。来年度は月に一度、教科会などを入れ、その場で振り返りや打ち合わせを行えるようにしていきたい。

7. おわりに

昨年度に引き続き、助成金をいただき多くのことに取り組ませていただいた。そのおかげで「これもしたかったのに」と考え、できていなかったことが多くできるようになった。そして、それが最終的には生徒に還元され、生徒たちの達成感や充実感につながっていった。また、教職員自身も選択の幅が増えていき、従来通りではなく新たな視点での取り組みについて考えるきっかけにもなった。昨年度に引き続き、本研究を通して学校づくりについてより深く考えることができたように思う。これからもより良い学校づくりを目指し、様々なことに挑戦していきたい。

最後に、昨年度に引き続き、このような機会を与えてくださったパナソニック教育財団の皆様、紙面を借りて深くお礼を申し上げたい。